

# 単語の文体と意味

宮 島 達 夫

## 要 旨

動詞の文体的な性質と語意的意味とのあいだには一定の相関関係があり、文章語は大規模な、または公的な動作をあらわしがちだが、同様の相関関係は名詞や形容詞のばあいにもみられる。すなわち、文章語は日常語にくらべて

大規模な（草原）対「くさはら」

価値のたかい（庭園）対「にわ」

非個別的な（樹木）対「き」

抽象的な（市場）対「いちば」

公的な（見解）対「意見」

現象の表現にかたよる。この対立は、おもに和語と漢語のあいだにみられるが、本質的には語種ではなくて文体の対立であり、おそらく日本語にかぎらず諸言語に通じる現象である。

## I はじめに

わたしは、国立国語研究所報告43『動詞の意味・用法の記述的研究』（宮島一九七二）の「第3部2 動詞の意味と文体的性質」で、動詞の文体的な性質と語意的意味とのあいだには一定の相関関係があ

ることを論じた。同様の相関関係が名詞や形容詞のばあいにもみられる、というのが、この論文の趣旨である。以下、「単語の文体的性質」（文体的特徴）とよぶべきところを、略して、単に「単語の文体」とよぶ。単語の文体を、おおきくは、あらたまつた場面やかきことばでつかわれる（文章語）、使用範囲にとくに制限のない（日常語）、くだけた会話にかぎられる（俗語）の三段階にわけられる。くわしくは、宮島一九七七を参照していただきたい。なお、ここでつかつた用例の出典については宮島一九七二参照。ただし、表記は現代風になおした。

動詞の文体と意味との相関というのは、たとえば、つぎのような事実をさす。文章語である「建築する」「運搬する」は、おおきな対象、大規模な動作に限定され、「小屋を建築する」「テーブルにコーヒーを運搬する」などというのは、不自然である。日常語である「たてる」「はこぶ」には、このような制限はない。おなじく、文章語の「回答する」「謝罪する」は公的な動作にかぎられ、「親がこどもの質問にこたえる、こどもにわびる」を、これらにかえることは、よほど特殊な場面をかんがえないかぎり、不自然である。おなじようなことは、名詞についても指摘できる。「かざぐるま」と「風車（ふう

しや)、「手紙」と「書簡」は類義語だが、こどものおもちゃとしての「へかざぐるま」や、家族・友だちのあいだの私的な「手紙」を、文章語である「風車」「書簡」であらわすのは、むしろかしい。

文体と意味とのこのような関係が、正面からとりあげられることがすくないのは、この事実が気づかれていないからではなく、ぎやくに、あまりにも当然のこととみなされているためだろう。「書簡」の文体上のかたより(かきことば、またはあらたまつた場面でつかわれる)も、その意味上のかたより(公的な、または重要なものをさす)も、区別されることなしに、要するに「手紙」とは「語感」がちがうのだ、といった形でかたづけられることがおおい。われわれの研究は、このようなあいまいさを分析し、克服するところから出発しなければならぬ。

もし、ここで「文体」へ意味とよんでいるものが、おなじ事実のちがつた呼び名にすぎないならば、または、つねに必然的にもなうべき現象であるならば、これらのあいだの「関係」を論じるのは無意味である。しかし、「きのう、きょう、あした」と「昨日、本日、明日」とのあいだには、あきらかな文体上の差があるが、これらのさしている対象そのものにまで、差があるとは、とてもいえない。「昨日」は「きのう」にくらべて、とくに重要な日をあらわす、といったことは、ないのである。だから、文体と意味とのあいだに、以下にのべるような傾向がみられる、ということは、指摘しておく価値がある。

## II 関係の分類

### 一 文体と対象の規模

「風車」のように、おなじ表記で、訓よみの和語よりも、音よみの漢語の方が文章語的、という例はおおい。そのばあい、漢語は、和語にくらべて空間的におおきなもの、大規模な現象をあらわす傾向がある。混種語だが、「工場(こうば)」と「工場(こうじょう)」も、その例にあげることができる。

「草原は」「くさはら」とも「そうげん」ともよめるが、「そうげん」のほうが、ひろびろとしたところである。

○秋天一碧の下、唵々と蹄の音を響かせて草原となく丘陵となく狂気のように馬を駆けさせる。(李陵 一八八)

は、「くさはら」とよめないこともないが、「そうげん」が自然である。

○汚い二畳ぐらの部屋で、窓から、裏の草原が見えた。(自由学 校二〇八)

は、当然「くさはら」である。つぎの例は、どちらによんでもいいだろう。

○右へ取つて少し行くと林が尽き、広い草原が広がった。そしてそこに私はまた野火を見た。(野火 二二)

「おか」と「丘陵」は、おなじ程度のもをさすこともあるが、「裏の丘へたけのこを盗みに出掛けて行つた。(放浪記 六八)

○彼は丘と丘とのあわいになった窪地のようなところに一旦おりて、そこを越して向う側の丘地をのぼって行つた。(むらぎも三

### ○四)

くらしいの、ちいさなものは「丘陵」といいにくく、ぎやくに、

○対岸は鉢甲の山塊となり、鉢甲の丘陵から雪笹山の西につづく  
仙人沼峠と(落城 一一)

○戦闘は、数百マイルのかなた、チュニジアの丘陵で行われている。(芸術新潮 八月二八一)

のように大規模なものは「おか」とはいいにくい。

文体的には、「土手」「つつみ」「堤防」の順でかたい表現になり、対象の規模もこれに比例する。「防波堤」は、辞典では「……堤。」と説明されるのがふつうだが、

○中央の赤い灯は、豊浜港の堤防のあたりである。(潮騒 一六一)を「つつみ」に、まして「土手」にするのは、不自然である。

「ぬかるみ」と「泥濘」は、おなじ現象をあらわすこともある。

○佐土原勢の主力がぬかるみに踝や胼をうずめながら、(落城 三九)

○佐土原勢が泥濘の沢道を進んできた時、(落城 四〇)しかし、ちいさな現象に後者をつかうのは不自然である。

○彼はやつと学校を出た。ぬかるみの水が夕闇の中に白く光っていた。(波 五四)

「本屋」「薬屋」などに対して、「書店」「薬局」は、かたい単語だから、対象としても、おおきな、りっぱな店をあらわす、といいたくなるのだが、じつさいはどうだろうか。どんなおおきな店でも、「本屋」とよんでおかしくないだろうし、文章のなかでは、ちいさな店でも、「書店」というだろう。つまり、この区別はもっぱら文体的なものであるようだ。建物としての店ではなく、職業として、

○バスケット姿が、オイチニイの薬屋よりもはかなく思えた。(放浪記 一三六)

のようにいうばあいは、「本屋」「薬屋」である。しかし、この差が、いま問題にしているような文体のちがいの関係でとりあげていい

のかどうかは、不明である。

規模の問題は具体名詞にかぎらない。現象をあらわす名詞でも「大雨」と「豪雨」とでは、文章語的な後者の方がつよい雨である。「なみ」のあらわす対象には制限がないが、「波浪」「波濤」などは、文体に応じて、おおきなへなみをいう傾向があるだろう。

○風が撒きちらしている波の飛沫は、逆巻く霧になつて視界を覆うた。(潮騒 一四二)

は、これらにおおきかえてもいいが、

○渚の波は、音も聞えずに白いレース模様を、画いていた。(自由学校 三〇七)

のように、しずかなへなみは、やはり「なみ」がいい。

「ほのお」と「火炎」でも、後者は大規模な現象をあらわす。

○番所をなめている炎の中で、今泉史信は割腹して死んだ。(落城 三七)

○敵艦の甲板では火炎の中を人影が右往左往しているのも(実話雑誌 四月三〇)

はとりかえることができるが、

○岩壁の梵字の下にゆらめいていた三本のろうそくの炎をおののかせ、(潮騒 八一)

を「火炎」にすると、おおげさになる。

抽象名詞や形容詞のばあいには、規模というより程度というべきかもしれないが、文章語は日常語にくらべて規模が大、または程度がたかい現象にかたよる。

○そこへ三子が湯屋の掃り途に立ち寄った。(生まざりしならば 二〇三)

○一旦右賢王を破りながら、その掃蕩別の匈奴の大軍に囲まれて惨敗した。(李陵 一五六)

を、それぞれもう一方におきかえることは、適當ではない。「かえり、掃蕩」も同様。

「けが」と「負傷」は、きわめてちがいが、

○彼は海へ入るたんびにどこかに怪我をしない事はなかつたのである。(こころ 二二七)

では、おそらく、すり傷程度のけがで、「負傷」というには、かるすぎる。

○懐柔の手があまり効果がないとみてとつてから、(人間の壁「上」 一三七)

○どれも大して効果なかつたと伝えられている内地の都市の空襲(掃蕩 六三)

の「効果」は、ともに「ききめ」にかえられるが、個人的なできごとである「人間の壁」の例にくらべて、「掃蕩」の例は大規模な、社会的な事件だから、すこし問題だろう。

「ひさしい」を「ながい」、「高度」を「たかさ」でおきかえることは、意味的にはあまり抵抗ないとおもうが、文章語である「ひさしい」「高度」を量的にわずかな現象につかうのは、ひっかかる。つぎの例を参照。

○五十余年の久しい間治乱の中に身を処して、人情世故にあくまで通じていた忠利は(阿部一族 三九)

○お島は長いあいだ養父母の体をもんでから(あらくれ 二〇)

○巨大な積乱雲——高度一万二千米と推定される——にさえぎられて(人物往来 六月 六九)

○体は二米ばかりの高さからほとんど四十五度の角度で水面に落下する。(それいゆ 40 一八〇)

「決心、決意」「おもいつき、着想」「変更、変革」「おもさ、重量」なども、文体の差と意味内容の程度の差がからんでいる。

「有名」と「著名」でも、

○スターリンは、世界的にはまだ有名でなかつたのだろうか？(むらぎも 三〇九)

のように大規模な例はいいが、つぎのように小規模のばあいには、おきかえにくい。

○お爺さんのトンキョウな有名な呼び声にも今の淋しい私には笑えなかつた。(放浪記 二六四)

「くわしい(くわしく)」は、一般に「詳細な(詳細に)」とおなじである。

○その臨終の光景は息子、遷の筆によつて詳しく史記の最後の章に描かれて(李陵 一七〇)

は、「詳細に」といいいい。しかし、つねにおきかえ可能というわけではない。ある表現をべつつの、ややながい表現にいいかえるにすぎないばあいは、「くわしくいう」を「詳細にいう」にすると、おおげさである。

○相手は「世間」というもの、詳しくいうと、甲でもなく乙でもないと同時に甲でもあり乙でもあるところの「ひと」、アノニムな「ひと」である(人生論ノート 四六)

○現実の(真とは言わなかつた)真味を如実に描写するものである。詳しく言えば、作家のサブジェクティブイチャー即ち主観に摂取し得た現実の真味を如実に再現するものである。(平凡 一〇九)

## 二 文体と対象の価値

「金／＼がね」「銀／＼しろがね」「少女／＼おとめ」「あさ、あけがた／＼あかつき、あけぼの」のように、日常語と雅語とがほぼ同義的であるばあい、後者の対象そのものまで美的価値があるかのように感じがちである。ほんとうにそうかどうかは、むずかしい。ひらきなおつて、みにくい少女は「おとめ」ではないのか、あれ模様の朝は「あけぼの」とよべないか、あるいは「失念」は「ものわすれ」よりも高級なことなのか、といわれれば、対象にそのような差はない、といわなければならないだろう。しかし、やはりわれわれは、これらの単語が対象そのものを美化しているように感じとりやすい。つぎにあげるのは、「黄金」をとくに価値あるものとして、「金」に對立させ使われた例である。

○作者は口癖のように自分は真鍮だとこそいつて来たれ、金とも黄金とも一度としていつて来ていなかったことが（むらぎも 一九二）

もつと客観的に、対象の質の差が文体とむすびついているばあいがある。うえに規模の問題とした「工場」「堤防」などについても、より近代的な対象をあらわす、という質的な差もからみあつてはいるのだが、同様のことは、「庭園」「道路」「薬剤」などについてもいえる。これらは、文体的に文章語であるとともに、対象も高級な、きちんと手をくわえられたものをいうのであつて、

○農家の庭に無言ではいつて来た仙子を眺めて、（厭がらせの年齢 二八七）

○林の中ののだらだら上りに、草を踏み固めた道が、奥へ向つてい

た。（野火 一四六）

○よく馬の病気に飲ませる赤玉という薬をいく粒かのんで（土上 六八）

などの例をおきかえることは、むずかしい。「しかけ、機構」「道具、器具」でも、それぞれ、後者のほうが複雑で高級だろう。「おもちゃ」と「玩具」については、一方しか使えないような対象があるかどうか、疑問だが、「がんぐ」の方が高級なもの、あるいは近代的な生産物だ、という受けとりかたをする人があるかもしれない。

「小石」が中立的な日常語なのに対し、「石ころ」「小石」は、ややくだけた表現であり、それに応じて質もさがる。「波」の「小石」は「石ころ」にしてもいいが、「思出の記」ではおきかえるのが不自然である。

○行介は小石を二つ、三つ拾つて、彼女がもぐつたあたりに投げつけた。（波 二四九）

○四方は小高く石垣を築き上げて、上には平石のあわいあわいに小石を敷きつめ、（思出の記 上 二四）

「かおり」「生誕」は、とくにいい「におい」、重要人物の「誕生」である。

○店の角をまがって木戸にちかぶくと、花の匂いがした。（人間の壁 上 三三〇）

○聖なる人の誕生を祝し、それを記念せんための（青銅の基督 四三）

は「かおり」「生誕」でいいが、

○山の泉のように泥の臭いがなく、美味であつた。（野火 七五）

○彼は僕の誕生の時から知つていたので（思出の記 上 一七）

は、やはり「におい」「誕生」でないと、おかしい。

「くさい」「こうばしい」も、もちろん「におい」「かおり」のちがいに対応する。

○食いちらした米がこぼれ、まだ男の臭い匂が漂っていた。(冬の宿 一四〇)

○バナナやぼんかんが庭先で一年じゅう香ばしい実をつけている台湾の官舎に、どうかして母を招待することをさえ夢見た。(真知子「前」一四四)

「りこうな」「かしこい」「賢明な」「聡明な」は、  
○彼女に似ていて美しく、神経質で利口な少年だった。(冬の宿 五三)

のような、中性的な文脈では、大差ないようにみえる。しかし、「かしこい」は、(すくなくとも東日本では)「りこうな」よりも文章語的で、「賢明な」「聡明な」は、さらにその度合いがたかそうだ。これに応じて、つぎのようなちがいがあつて、まず、「りこうな」は、ときとして、ずるがしこい、というマイナス評価のニュアンスをおびる。

○利口な重役はこの仕事を「日本帝国のため」と結びつけてしまった。(蟹工船 三〇)

また、動物については、「りこうな」「かしこい」はいいが、「賢明な」「さうめいな」はいいにくい。

○山羊は、なかなか利口な動物であつて、(自由学校 二三〇)  
さらに、「聡明な」は、とくにすぐれているばあいにつかわれる。

○彼らの諂諛を見破るほどに聡明でありながらも真実に耳を傾ける事をきらう君主が、(李陵 一六七)  
なお、ここで問題にした「価値」は、対象的意味のなかに客観化

されたものであつて、言語主体の感情的意味ではない。感情的意味をもつ単語が俗語的なものにおおひことは、あきらかな事実である。西尾一九七七・宮島一九七七を参照。文体と感情的意味と対象的意味にふくまれる価値とは、区別が困難なことがすくなくないが、理論的には、やはりわかるべきものとおもう。

### 三 文体と対象の個別性

「樹木」は、ふつう、

○樹木の厚く茂つた東山に、寺の大屋根や塔が柔かく抱かれて(掃郷 二四一—二四二)

のように、おおくの木をさすか、

○我々の通常樹木に感じる美感の根柢をなす、あの自然さを欠いていた。(野火 五八)

のように、木一般を抽象的にさす。「木」には

○木がこみすぎた感じの庭の宙に、雨の糸が白く光つたかと思うと、(掃郷 一七六)

のように、「樹木」と共通の用例もあるが、

○腹立ちまぎれにつかつかと樹のはたへ立ち寄り、頭大の石を両手にかかえて、投げつくれば(思出の記「上」一六二—一六三)

○往來に大きく美しいアカシアの老樹が枝をひろげているのを見つけた。その木が、その日からこの男のつまましい生活の伴侶となつた。(掃郷 三三三)

のように、特定、個別の木をさす用法もある。これは、「樹木」では、いいにくい。

「山岳」も、「やま」にくらべて大きなものにかたよるといふ、量

の面での限定があるとともに、集合名詞的な側面ももっているようである。「上越国境の山」や

○私を取り巻く山と野には絶えず砲声が響き、頭上には敵機があつたが、(野火 四四—四五)

は「山岳」におきかえられるが、「富士の山」や

○恭吾は小田原の急行に乗るといつて自動車で山を降りて行った後であつた。(帰郷 三五—三五)

を「山岳」でいうのは、むりである。

「しなもの」と「物品」は、

○浜で品物を見せるのが、いちばん海女たちの購買欲に訴えることを(潮騒 二—六)

○群集は、目の前の物品を手当り次第掻き廻し、引つたり、(真知子「前」一五一)

のように、不特定・多数のものをいうときには、どちらでもいいが、○あのタケノコ時代にも、これだけは、手離さなかつた品物である。(自由学校 一六〇)

のように、特定・個別のものには、「物品」とはいいにくい。

このグループに属するものには、まだ、にた意味の漢語要素をかきねた「婦女、岩石、河川、海洋、船舶、刀剣」などがある。ただし、この種のつくりかたの漢語が、すべて個性性をもちにくいわけではない。「倉庫、宮殿、書簡、座席、皮膚、顔面」などは、個別的对象をさして「この(かれの)く」といっても、あまり抵抗はないだろう。また、語構成のしかたはちがうが、「性質」と「属性」をくらべると、より文章語的な後者は、「このラジオの属性は」のように個物をさすばあい、あまり適当ではないだろう。

なお、中国語でも、「樹／樹木」「書／書籍」「花／花卉」「河／河流」などの対において、後者は概括性をもつた名詞だという。(香坂 一九八三、一七八一—一七九六)

#### 四 文体と対象の抽象性

「はなしの中身」「はなしの内容」のように、抽象物としての「中身」と「内容」は、おなじものである。しかし、「袋の中身」「サンドイッチの中身」は、「内容」ではいえない。文章語である「内容」は抽象面にかたよっている。

○「市場」は「いちば」とも「しじょう」ともよめる文脈もあるが、○橋の下の市場で、血眼になって、ポロの山を掻き回した結果、

(自由学校 一七〇)のように、具体的なモノをあつかうのは「いちば」で、「しじょう」は原則として

○中東並びに東アフリカ、インド方面の市場を引きうけ、中東石油を精製してこれに配給することを目的としたものである。(世

界 一〇月 一六四)

のように抽象的なばあいか、

○市場は比較的閑散で、白熱的な場面を見ることはできなかった。それでも場内を見わたして驚くことはおびただしい電話の数である。(知性 二月 九〇)

のように、モノをあつかわない、株式市場である。

「味、味わい」「足あと、足跡」「つまずき、蹉跌」「圧迫、抑圧」「つりあい、均衡」なども、それぞれ、あとにあげた文章語が抽象的なほうにかたよる。

「孤独」は「ひとりぼっち」よりも文章語的である。そして、  
○真知子はこのごろは学校に来てはひとりぼっちで寂しかった。

(真知子「前」三〇)

○周囲の騒がしい春が彼を一層孤独にした。(田園の憂鬱七)

をくらべればわかるように、「孤独」は客観的な事実として「ひとりぼっち」であることにつけくわえて、そのことからくる主観的なさびしさの感情をとまなうことがおおい。

## 五 文体と対象の公私の別

「命令」をくだす主体は公的なたちばにあるのがふつうだが、私的なこともある。「習慣」の主体も、社会か個人か、両方可能である。これらの単語よりも文章語的な「指令」「慣習」は、主体が私的な個人であるつぎのような例では、つかいにくい。

○そうして育てられた子は、自分が親になったとき、やはり子供にむかって、筋の通らない命令を押しつけるに違いない。(人間の壁「上」一九二)

○夕食後に、毎夜寝る前の習慣で、コニヤックのグラスを置き、ぼつねんとひとり味わっていた。(帰郷三四〇)

「命令、指令」のようにサ変動詞の語幹になるものは、「命令する、指令する」という動詞のばあいにも、おなじような文体・意味間の関係をしめす。なお、「いいつけ(る)」は「命令(する)」よりも、文体的にはくだけており、より私的である。

「見解」は「意見」にくらべて公的なことがらに対するもの、というかたよりがある。

○NATO理事会が終わって、公表されたコムニケは、低調きわ

まるものであった。各国の意見が一致しないためである。(ダイヤモンド 五月一九日四)

は「見解」でいいが、つぎの例を「見解」にするのは、あまり適當ではない。

○最近結婚式を挙げた先輩の意見を参考にしたり、また会社の上役のご意見を聞くのもいいでしょう。(主婦と生活 一〇月四六)

「機密」も、一般には公的で重要な「秘密」に限定され、

○河井たちに出あったこと、それから気持ちのよい夕暮れの公園をぶらぶら歩いてきたことは話したが、その他についてはなぜということなく話しそびれた。その些細な秘密のため、母の干渉がましいことばに対しても、真知子はいつもほど単純に怒れなかった。(真知子「前」七六)

のような個人的なものには不適当である。

このグループにはいるものには、まだ「つかい、使者、使節」「いわけ、弁解、弁明」「承知、承諾」「なかなおり、和解」「ぬすみぎき、盗聴」「つげぐち、密告」「寄付、寄贈」「きまり、規則、規約」などがある。「みずあび、水泳」「かけっこ、ランニング」なども、公私の別、というのも変だが、これらに近いところがある。

「だいいじな」「たいせつな」と「重要な」のちがいが、以上の例と共通する面がある。ただ、公私の別、というよりも、基準の客観性が問題なので、ずれるかもしれない。

○大きな子どもは大事な箒をそと持っておる(王「上」一一五)は、こどもの主観的な評価をいつており、「たいせつな」にかえてもいいが、「重要な」というと、主観はともあれ、客観的な価値がへ重



要)なのだということになって、力点がちがってしまふ。

### III 考察

以上、文体的特徴が意味のどのような点に関係をもつかを分類したが、つぎに、いくつかの点についての考察をのべる。

#### 「文体の範囲の再検討」

ここでは、文体というものを、もっぱら、かたい文章語から日常語、さらにくだけた俗語にいたる一本の線のうえにならんだものとして、それと意味との関係をかんがえた。しかし、文章語にはいるものは、からずしもかたい漢語だけではない。和語の系列の雅語も、やはり文章語である。「あけぼの」と「払暁」は、かきことば専用という点では共通性があるが、文体は、かなりちがう。日常的な文体からどのくらいはなれているか、を文体の垂直分布、文章語のなかでの和語系と漢語系の差を文体の水平分布とよぶこともできるだろう。文体の水平分布に応じた意味の差は、あるだろうか。「まきば」と「牧場」のちがいをかんがえると、「まきば」は、現在目のまえにひろがっている程度のものをさし、したがって、「世田谷区ほどもある、おおきなく」という文脈では、「牧場」のほうが適当だとおもわれる。日常語からの差という点では、むしろ、「まきば」のほうが雅語的で、会話にはでてこないようだが、これは、うえにのべた、文章語のほうが大規模、という傾向に反する。このことを説明するには、雅語的なものは、非日常的であるにせよ、かたい文章語に比べれば具体的・直接的な場面にかたよる、というような、水平分布と意味との関係をとりにれる必要があるかもしれない。にたことは「ともし火」と「灯火」についてもいえるだろう。

〈文体〉の概念をさらに拡大して、「シャボン、蓄音機」は「石録、プレーヤー」にくらべてふるい単語であり、また、おおくの外来語は、新語であるにとどまらず、まさに外来語的に感じられる単語であることまで、ふくめることもできる。これらの新語性・外来語性と、対象のあたらしさ・外来性との関係は、おおくの単語についてみられる。(松尾・西尾・田中一九六五)

#### 「語種と文体」

ここであげた例の大部分は、大規模、価値がたかい、抽象的ななどの意味的特徴をもつ文章語が漢語で、これに対立する日常語が和語、というものだった。だから、これは文体と意味との関係であるとともに、見方をかえれば、語種と意味との関係でもある。同音語が漢語に、パ行音が外来語におおいことが、これらの語種の形式上の特徴であるように、漢語は対立する類義語の和語にくらべて、大規模……という意味上の特徴をもっているのである。現象としては、この記述はただしい。しかし、漢語(字音語)とはなにか、といえ、古代中国語からの借用語であって、大規模……という特徴はこの本質から直接でてくるものではない。その点は、たとえば「ケーキ」「ホテル」という外来語が「菓子」「宿屋・旅館」にくらべて欧米風のものをおおわすのとは、ちがうのである。直接に関係をもつのは、あくまで文体と意味であって、歴史的な事情から漢語が文章語におおい結果、間接的に語種と意味とが関係するにすぎない。「ながい」と「ひさしい」、「意見」と「見解」など、おなじ語種のなかでも、文体のちがいに応じた意味の対立がみられることも、このことを証明している。(参照、宮島一九七二、七二五～六)

#### 「意味的対立の根拠」

名づけの動機からすれば、「くさはら」と「草原」とは完全な同義語であってもいいはずのもので、かたい文体のなかでつかわれる「草原」が、ひろい空間をさすことがおこつたために、いわば後天的にそのようなニュアンスをおびたのだ、とみることが出来る。日常的な会話のなかの単語よりも、公的な場面、美的な文体でつかわれる単語のほうが、大規模な、公的な、価値ある対象をさすことがおおいのは、しぜんである。そして、はじめは言語活動のなかの量的・傾向的ながいにすぎなかつたものが、ついには言語の単位としての単語の意味そのものにくいこむ。意味変化の一つの型に〈伝染〉というのがある。もと肯定にもつかわれた「全然」が、否定にとまなう使用がおおいたために、単独でも否定の意味をもつようになつた、というような例である。これは、ほかの言語単位からの伝染だが、使用条件が意味に影響したものの、というような形でくれば、ここで問題にしているのも、一種の伝染である。ただし、おなじ言語単位の、一つの機能(文体)がほかの機能(意味)に影響したものである。

しかし、いくつかの単語について文体と意味との固定した関係ができてしまうと、その構成要素自身が、そのような関係をそなえたものになる。「草原、高原、雪原、氷原、地雷原」などにならつて構成される新語は、単なる「はらっぱ」よりも、ずっと大きいものを連想させるだろう。つまり、「ーげん」は、ややかたい文体的価値とかなりひろい空間をさすという意味の特徴とを本来そなえた要素として、新語をうみだす。そして、そのような語構成要素によつてつぐられ、成立した瞬間から文体にみあう意味の特徴をもつていたのはどれかを、いちいちの単語について決定するのは、きわめてむず

かしい。「そうげん」も、じつは、そのような例の一つかもしれないのである。

うえて個別性にかける、とした「樹木」の類については、語構成の面からいって、そのようなかたよりをもちやすい、ともいえそうだが、いちおう、文体の問題として処理することもできるとおもふ。

#### 「対立の型」

おおくのばあい、対立する一方の日常語は意味の範囲がひろく、もう一方の文章語は範囲がせまくて、これにふくまれる形になる。「かおり」であらわせる現象はすべて「におい」でもあらわせるが、その逆はなりたたない。「ほのお／火炎」「みち／道路」「誕生／生誕」「意見／見解」「秘密／機密」「有名な／著名な」「くわしい／詳細な」など、みなこの型に属する。「小石／石ころ」は、俗語的な、くだけた文体の「石ころ」の範囲が日常語の「小石」にふくまれた例である。「くさはら／草原」「おか／丘陵」「いちば／市場」などは、どちらも他方に完全にふくみこまれることがなく、部分的にかきなりながら、それぞれ固有の領域をもっている、という型の対立である。(もちろん、これら二つの型の差は程度の問題で、BがAにふくまれる、というとき、一部には、Bというのが自然なのだがAといえないこともない、というばあいもありうる。これは、Bが固有の領域をもっている、というのに、きわめてちがひがある。)

なお、意味のかたよりは、直接的に対立する類義語があるばあいに、いちばんわかりやすいのだが、類義語がなくても可能である。「草原」には、対立する「くさはら」があるが、「高原、雪原……」には、「くさはら」にあたる単語はない。しかし、これらが大規模な(空間的にひろい)ものをあらわす、という事実、やはりみとめら

れる。

〔意味的対立の普遍性〕

文体と意味との関係は、日本語にかぎられるものではない。単語に文体的な層があるのは、どの言語にもみられる普遍的な現象だろうし、ある特定の文体的特徴が特定の意味的かたよりとむすびつきやすいのも、ごく自然なことである。したがって、ほかの言語についても、よく似た事実があるのでないだろうか。その一例として、ドイツ語のばあいを宮島（一九八八）に報告した。

〔参考文献〕

- 香坂順一『中国語の単語の話——語彙の世界』（光生館 一九八三・六）  
徳川宗賢・宮島達夫『類義語辞典』（東京堂 一九七二・四）  
西尾寅弥『語の意味の周辺』（松村明教授還暦記念 国語学と国語史）明治書院 一九七七・一一）  
松尾拾・西尾寅弥・田中章夫『類義語の研究』（国立国語研究所報告28）（一九六五・三）  
宮島達夫『動詞の意味・用法の記述的研究』（国立国語研究所報告43）（一九七二・三）  
宮島達夫『単語の文体的特徴』（松村明教授還暦記念 国語学と国語史）明治書院 一九七七・一一）  
宮島達夫『動詞の文体と意味』（日独語対照研究グループ編『二言語辞書のための語場理論に基づく基礎語彙の体系的記述』一九八八・三）

——国立国語研究所員——